白嘘物語

つくもうそものがたり
百にひとつ足りない九十九の物語

葉山ユタ

第一話　電話待ちつつ

曇天のねずみ色を眺める。
電源を切って、ラインも抜いて、風の音に耳を澄ませる。
そうそう、植木鉢に植えた花の種は芽を出 さず、代わりに小さな白い茸が生えてきたよ。

第二話　オオウバユリ

足もとで声がする。

大きなフキの葉の下からだ。日を遮られた仄暗い緑色の闇の中から。

ウバユリの根を食べる算段をしているのは、身長２０センチほどの翁が二人。

素知らぬふりをしながら、そのひそひそ声に注意を向けていると、羽がボロボロになった破れたコウモリ傘のような鴉が一羽、笑いながら頭上を飛んで行った。

ほう、あんな羽根でも飛べるものかね。

三人で空を見上げた。

サラサドウダンツツジとは良い名前。

第四話　夜の穴

家で仕事をしていたら、晩御飯を食べていない事に気が付いた。
空腹を満たそうにも、すぐ食べられるものが何も無い。
もう時間は深夜だが、コンビニにでも行って何か買ってくることにしよう。

身支度を整え家を出ると、玄関のすぐ前から先が大きな穴になっている。
道幅全てを四角くくり抜いたようで、幅、深さ共に２メートルはありそうだ。

何だよ！コンビニに行けないじゃないか！いつの間に、こんな工事をしていたんだ？
憤りながら、穴の際にある隣家のブロック塀の上を歩いて行こうと、よろよろ塀の上に立ちあがったらギョッとした。

塀の上を黒猫が歩いていて、緑の瞳でこちらを睨み、ミギャーと鳴いた。
威嚇されて、スゴスゴと塀を降りると、黒猫は悠々と塀を渡りきり、そのまま夜の闇に融けこんでいった。

何だか今日はついていない。
外出は止めて、水でも飲んで寝てしまおう。

カフェと雑貨屋さんに改装されつつある古民家。

第六話　金の魚

私は教会の入り口で、毎日チェンバロの曲を聞いています。
毎日、毎日、私の側を沢山の人が通り過ぎています。
誰もいない時、私はまどろんでいます。海の中を泳ぐ夢を見ながら。
そんな時は、どうぞ、そっとしておいて下さい。

第七話　探偵事務所

赤い煉瓦造りの小ぎれいなビルヂングです。

三階建てでね。入口の左側には輸入商会、右側にはテーラーが入っています。
ええ、男性服も女性服も取り扱っているようですねぇ。

入口のガラスのドアの向こうに階段があります。石造りのね、どっしりした造りです。
建てたのは、どこぞの子爵のご子息でして、ああ、まぁそれはどうでも良い事でした。

階段を上がった二階には事務所が入っています。普通のね。
三階まで登ると、廊下の右側に曇りガラスの嵌ったドアがあります。
そのガラスに書いてあります。
「探偵事務所」って。

さぁ、どうぞ訪ねてみて下さい。奇跡の探偵が、あなたの悩みを解決してくれますよ。
彼が、あなたの悩みを面白いと思えばですけれども。

第八話　一瞬の跳躍

一瞬の勇気、一瞬の知恵、一瞬の天啓。そして一瞬の跳躍。
例え、足もとが崖であったとしても。

第九話　緑は青

小さな小川の上に丸木橋がかかっていた。
雨上がりの森の中だ。

今は五月の終わり。
水芭蕉を見に来たのだが花はすっかり終わってしまい、葉ばかりがわさわさと大きく茂っている。
意外と水芭蕉とは大きな植物だ。

ふと見ると、小川の中を幼女が歩いている。
裸足で、緑色の雨合羽を着て、ばちゃばちゃと嬉しそうに水音を立てて。
とても楽しそうだったので、思わず声をかけた。

「ねぇ、水は冷たくないの？」

幼女がくるりと振り返って私を見た。黒いつやつやした真ん丸な目だ。
そして、ククッと笑うと、そのまますーっと水の中に身を投じた。
水面に美しい線を引いて、キレイな緑色の雨蛙が一匹、水芭蕉の群生の中に消えて行った。

第十話　老楓

私は老いた楓でございます。

すっかり歳をとってしまい、もう葉を付けるのを止めました。
その代わりと言っては何ですが、足もとに小さな白い花が沢山咲くようになりましてね。
毎年、この白い花が敷き詰められたように咲き誇るのを、とても楽しみにしているのですよ。

第十一話　大天使

大天使ミカエル様。
足の下の年老いた竜は、まだ暴れているのでしょうか。
右手に握られた剣は、まだ鞘に納められないのでしょうか。
人の心に巣食う悪魔は絶える事がないのでしょうか。

第十二話　地を這うもの

森の中、足もとを見る。
芝生のように見えるのは明るい緑の苔。
それは、透明感のある美しい緑のカーペット。

歩けば、しっとりフワフワとあなたの足を受けとめてくれます。
苔類、地衣類なんて汚そう、気持ち悪い、なんて言いませんよね？森ガール。

第十三話　初夏の川

さて、魔法使い。
初夏の太陽を閉じ込めて、この川を透明に凍らせたまえ。
上手く行けば君、沢山の乙女が君に恋をするだろう。

第十四話　曇天

池の中に棲む魚に、曇天は好きかと訊いてみた。

こぽこぽと小さな白い泡を口の端から登らせながら、曇り空は好きだねぇ、空を真っ直ぐ見たくなるよ、と。
キラキラの青空はキライなのだ。眺めていると、何だか自分がいなくなってしまうような気がするよ。
ああ、青い空は目まいの元なのだ。私は曇天と小ぬか雨が好きなのさ。

魚は、消え入りそうな声で呟くと静かに水の底へ沈んでいった。
私も薄墨を流したような曇天を見上げる。

おや、何だか天地がひっくりかえった気がするぞ。
地面と池の境さえ朧な曇天だ。

第十五話　シグナル

深夜の赤信号は透明な苺キャンディの愛らしさ。
吹く風は雨を期待させて生暖かく湿っぽい。
その湿り気が空気を水に変えてゆくのさ、だからあのシグナルは透明な苺色なんだよ。

足もとに川が流れだす。ほら、もう腰まで水に浸かってしまった。
横断歩道のシマウマも泳ぎ出す、動き出す。
もうすぐ苺は若葉に変わるよ。
行くも戻るも貴方次第。

第十六話　化石

ほら！雪の化石だよ。

雨が降ろうが、夏の日差しにさらされようが、白々と、黒々と、地面にめり込んでいる雪の化石なのだ。

第十七話　天地水

雲は池に溶け込み、睡蓮の葉は空に浮かぶ。
空は幽かに、雲は水にたゆたう。

モニュメントのごとき紅白の鉄柱も、ユラユラと朧な影だ。
池の匂いは、森の朽ちた病葉と同じだ。

ああ、その池は、生きているように見えて、本当は既に死んでいるのかもしれぬ。
水連は地中に深く花を咲かせるのだろう。

静けさを切り裂いて、ヒヨドリが高く鳴いた。

第十八話　公園にて

ハチ「寒いね 」
アヒル「誰もいないから、余計にね」
ハチ「目ぇ、イッちゃってるけど、大丈夫？」
アヒル「もう、何もかもどうでもよくなるくらい、揺さぶられ続けたからさ」
ハチ「誰もいない方がいいね」
アヒル「ああ、少しは寿命が延びるよ」

雨が降り続ければいいのに…。

第十九話　関守石

これはこれ、関守石。
この先は進むべからず、入るべからず。
こなたとそなたの決まりごと。

第二十話　空を見上げて

太古からの自然林が、ぽっかり街の中に残されて。

その中から空を見上げると、ぽっかり青い空が残されて。

額縁のように、リースのように、青葉が空を飾ります。

さて、天空の彼方よりこちらを見下ろす者あれば。

額縁の真ん中にいる、ちっぽけな私は何者でしょうか。

第二十一話　初夏の夜

日が暮れて、あたりはもう真っ暗です。
季節は初夏だというのに、私は寒さに身を縮め、上着を体に巻きつけるように抱きしめて道を歩いています。

私の家が見つかりません。
いつもの道を、いつものように歩いているのに、どうしても私の家に着かないのです。
すっかり歩き疲れてヘトヘトです。どこかで座って休みたい。
ちょっと休んで、もう一度、帰り方を考えたい。

穏やかな黄色い灯りに照らされた瀟洒な館が見えました。
私は、その灯りに引き寄せられ、ふらふらと館に近づきました。
ああ、この館で休みたい。ひょっとしたら、この館が私の家ではなかったか？
私は館の真っ暗な窓に顔を近づけ、中を覗こうとしました。

その黒い黒い窓のガラスに、疲れきった男の顔が映り
「お前はどこにも行けやしないよ」
と、一言つぶやいて消えたのです。
初夏の庭は、かぐわしい花の香りに満ちているのに、こんなに世界は穏やかなのに、私は家に帰れません。

第二十二話　お守り

私の秘密の庭に有るのは、お守りです。
青紫の美しい花を咲かせる草叢。
決して触れてはいけない、運命のお守り。
地獄の番犬ケルベロスが苦痛のあまりに流した涎から生まれたという呪われた草。
それがトリカブト。
そこに有る事を確認するだけのお守り。

第二十三話　ともしび

長い長い夏の一日が暮れ、ようやく闇夜がその大地を冷やす頃、私は、そこここの灯の前に立ちつくします。
見つめて動けなくなります。
灯の真ん中に、私は何かを見つけたいのです。
その中心に、宇宙にも等しい広大無辺な存在が、小さく膝を抱えてうずくまっているような気がするのです。
赤く、白く、金色で青い、暖かく冷たい何かです。
灯の中心を息をつめて見つめます。
ほら、灯りが揺らめいて私と交信を始めます。

第二十四話　東屋

木々に埋もれた東屋で、涼を取りながら密やかな午睡を楽しむ。

誰も来るな、誰も寄るな。私を一人にしておいて。

ここに来ても良いのは、風ほどの重さの蝶たちと、さえずりの美しい小鳥だけ。

第二十五話　花ざかりの娘達

色とりどりの雛罌粟は、己の若さと美しさに逆上せ上った娘達。
浮ついて揺らめいて、風に吹き荒らされる、薄紙の衣。
若く美しいのは一時の事。その花弁が散るのもあっという間。
一瞬の輝きを楽しんで揺らめくが良い。

第二十六話　縮景

聖母の出現に額づく聖女の後ろ姿を見る。

現世ではなく来世の幸せを約される聖女。

乙女は来世の幸福を夢見て現世の不幸を飲み込んだのか。

その後ろ姿を拝し祈る人々は乙女の心を知る事もなし。

第二十七話　渡御

お祭りの神馬が進む、 アスファルトの平坦な硬い道を。
馬車は進む、古装束の晴れの人達を乗せて。
時を超えて、場所を超えて、祓戸の大神たちよ、聞し召せ。
諸々の曲事 罪穢れを祓えたまえ、清めたまえ。罪と言う罪は在らじと。
天つ神 地つ神 八百万の神たちともに、天の斑駒の耳振り立てて聞こしめせと、かしこみかしこみも申す。
天清浄、地清浄、六根清浄。

第二十八話　青胡桃

栗鼠の楽団がやってくる。
ふさふさの尻尾ふりふり、頬をふくらませ、耳の飾り毛ピンと立て。

鬼胡桃の実食べたいか？
ドラム鳴らして、足並揃えて、栗鼠の楽団のパレードだ。
鬼胡桃の実、まだ青くて体に毒さ。

秋になって茶色に熟れて、枝から落ちたらまたおいで。
その時は、みんな、その小気味良い小太鼓の音を聞かせておくれ。
私も手拍子で付き合うよ。

第二十九話　風

「私」は「外」から「家」の「窓」を見ているけれども、「家」の「中」からは「窓」の「外」の「私」を見ているんだね。
でも、もう一つ。
「家」の「目」の「窓」が「風」を見ているのかもしれないよ

第三十話　赤松

花札の、ボウズのごとき赤松の枝。

第三十一話　睡蓮

青い水に足を浸して睡蓮の花を摘みに行く。
ふくらはぎに、コツンと何かが当たる。
鯉が目測を誤ったか、それとも人の足でも喰ってみようと思ったか。

重なり合って広がる水連の葉の下で、蛙や雀までもが密やかに太陽を避けている。
睡蓮の花を幾らかもらっていくよ。

この花を枕元に飾ると良く眠れる気がするのだ。
夏の午睡にふさわしい花。
浮世を忘れて、夢を見続ける花。

第三十二話　祈り

お説教は聞きたくない。

人の道も諭されたくない。

スピリチュアルのポジティブシンキングもご免。

でも、小鳥や狼にさえ、理を説き神の福音を伝えたと言う、聖フランチェスコの言葉なら、聞いてみたいと思うのです。

第三十三話　車窓より海を臨む

朝起きると、とっくに会社の始業時間を過ぎていた。
寝起きのぼんやりした頭で携帯を見ると、何度か会社から電話が来ていたようだ。
携帯と時計を交互に眺めた後、私は携帯の電源を切ってしまった。

もういいや、今日は休みだ。
私は普段着に着替えると、そのまま駅に向かった。
駅でお弁当とお茶を買い、適当な電車を選んで旅に出る事にしたのだ。
平日の午後の長距離電車はガラガラで、お弁当を食べて車窓を眺めているうちに眠くなってきて、そのうち私は寝入ってしまった。

目が覚めた時、窓の外には灰色の海が広がり、空は茜色に染まっていた。
まったく、今日はどれだけ眠れば気が済むのやら。自分自身に呆れながら、私は窓に寄りかかり、茜色の雲と黒々とした山のシルエットを眺めていた。

美しい。
世界が美しいと感じる時、私は幸福感に包まれて嬉しくなる。
社会や会社がどうであろうと、自然は何と美しいのだろう。
世間や人間がどうであろうと、この世界には美しい物が沢山有る。

それがあるから、私は生きていられる。
私は夕焼けと海の輝きを眺めながら幸福だった。美しい物さえあれば、私は幸せなのだ。
明日の決着については、今は考えないようにしておこう…。

第三十四話　妖精の囁き

僕はいつも庭を眺めて過ごしているの。
時々、華やかに着飾った人達が、花びらやお米を振り撒いて、笑いさんざめいているよ。
お酒を飲んだり、歌ったり、お天気の良い日は、みんなとても楽しそうなんだ。
そして、大抵はみんな僕に気が付かない。

でも、ごく稀に、本当に時たまだけど、僕に気づいてくれる人がいる。
その人はね、パーティの参加者に背を向けて、じっと僕を見るんだよ。
寂しいの？
それとも、ここを離れてどこか他所へ行きたいのかな。

第三十五話　山の神

深山に入りて美女に出会う。

饗宴を受け酩酊し、寝入りし折り、夢の中に山の神現れ、我に神剣を授け、かの美女は鬼である、この剣をもって斬れと我に告げ消ゆる。

我夢より目覚めしが、傍らに神剣在り。
我、神剣をもって美女を斬りければ、美女、白髪の鬼女となって息絶えにけり。

第三十六話　群れる

人の世の煩わしさから逃げ、来世では水に棲む鯉になってみようかしら。
でも、鯉は鯉で群れるもの。
たった独りで生きる命は、結局この世に存在しない。
ならば、せめて群れの中で、優美に悠々と、命の炎を燃やしたい。
水の中で揺らめく、金色の尾びれのように。
ひらひら、きらきら。

第三十七話　チベットのバター細工

チベットの僧侶たちが精魂込めて作るバター細工の仏像。
日本の和菓子のように繊細な形に、チベットらしいビビッドな色彩が華やかだ。
極彩色の砂絵曼陀羅と共に、人の目を引きつける。
宗教のシンボルとは、実に多種多様である。

第三十八話　港町

旅に出て二日目、あまりに天気が良いので、朝食後に港まで散歩をしてみた。
ホテルから徒歩十分ほどで、港まで行けるのだ。潮の香りも、旅情をかき立ててくれる。
空も海も、吸い込まれそうな透明なブルーだ。

潮風に吹かれながら、ぼんやり海の向こうを眺めていると、傍らに港内クルーズの遊覧船が着いた。
待合室に居た家族連れやカップルが、係員にチケットを渡し、船のタラップを上ってゆく。
どうしようかな、乗ってみたい気もするが、一人で遊覧船ってのも気が引ける。

周りを気にしてキョロキョロしていたら、台座の上の銅像の紳士がチラリとこちらを見て笑った気がした。
乗ればいいじゃないか、海はいいぞ、気分が爽やかになる…。
そうだね、せっかくここまで来たんだし。
私は、急いで乗船チケットを買いに走った。

第三十九話　山法師

取引先から会社へ戻る途中、あまりの暑さにへばってしまい、近くにあった公園で一休みする事にした。
幸いな事に、ラムネ売りのワゴンが出ていたので、一本買って木陰のベンチに腰掛けた。
日陰にいるだけで、体感温度が２～３度下がった気がする。ネクタイを緩めて、ラムネをチビチビ飲んだ。

炭酸飲料は、子供の頃から少しずつしか飲めない。小学生の頃は友達に、お上品ぶっているとからかわれたものだ。
ラムネのガラス玉をカラカラ鳴らしながら、ふと上を見ると、真っ白い四弁の花が沢山咲いている。
ああ、これは「ヤマボウシ」って言ったっけ。実家の近くの山に沢山咲いていたなぁ。

暑い夏、ラムネ、ヤマボウシ。
一気に、小学生の頃の夏の思い出が蘇る。
俺 は、上品ぶってたのかなぁ。単に、炭酸で喉が痛くて涙目になるのがイヤだったんだけど。
そう言えば、ヤマボウシの実は秋になると、赤く熟れてみんな歩きながら摘まんで食べていたけど、俺は食べなかった。
手や口元が汚れていると、家に帰ってか ら母さんに怒られるのが怖かったんだ。

大人になって、ヤマボウシがキレイな花だと気付いた。 秋になって、もう一度ここへ来たら、ヤマボウシの実を食べてみようか。
ラムネのビンを持ち上げて陽に当ててみる。

ガラス玉がキラキラ光った。
濃い青空には、もくもくと真っ白な入道雲が立ちあがっている。
夏はいつまでも夏のままだ。

第四十話　夏越の大祓い

六月の三十日、これから迎える夏を乗り越える為、半年の間に心身にこびりつかせた罪、穢れを反省し、祓い清めて頂く「夏越の大祓い」が各地の神社で行われる。

刻んだ麻の葉で体を清め、茅の輪を三回くぐってから、参拝をする。
そうする事によって、憂いは立ち切られ、寿命は千年伸びると言う。

神殿で祝詞を聞き、巫女舞を見させて頂く。
式典の後は、心なしか爽やかなスッキリした気持ちになる、初夏の神社。

第四十一話　高台より

港町は坂道が多い。
そして、閑静な高級住宅や神社などは、決まってその高台の天辺に在るのだ。
夏のジリジリする日差しを顔に受け、止まらない汗を拭きながら、坂を登り急な石の階段を上がると、やっと目当ての神社の鳥居が見えた。

友人が長い船旅に出ると言うので、この神社に水難除けのお守りを買いに来たのだ。
簡単に参拝してから、退屈そうに社務所に座っている巫女さんに声を掛け、目当てのお守りと、自分用にも肌守りを買った。
おみくじも引いてみる。
なになに、小吉か。可も無く不可も無くってところか。

汗が引くまで、木陰で涼みつつ海を眺めた。
船旅とはねぇ、飛行機で行きゃぁいいのに…。
あいつが大型船に乗って手を振っている姿をイメージしてみる。 満面の笑顔だ。
土産頼まないとな。

午後の紺碧の海はベタ凪だ。
神様、どうぞあいつが無事に旅を終え、帰って来ますように。笑顔で戻って来ますように。
もう一度、ちゃんと参拝し直すか…。

第四十二話　ホテル

ホテルのロビーの床を眺めるのが好きだ。
ピカピカに磨かれた床に、物事が逆像に映り込む。
着飾ったパーティの出席者達、会議に参加するスーツの男性、観光に出かけるのが嬉しくてたまらない子供達。
薄い影の様な人達が通り過ぎる。

ぼくは彼らの実像を見ない。
床に映る彼らの像を眺める方が楽しいのだ。 まるで別世界の映画を見ているようだ。
キリリと制服を着たホテルマンやベルガールが忙しそうにスクリーンの上を歩いて行く。

おや、小さな男の子が立ち止まった。
床を見つめるぼくの目を、あの子の目が見つめている。
でも、ぼくは、顔を上げない。その子の顔を見ない。
その子はすぐに両親の元へ走り寄り、玄関を出て行った。

ぼくは、この半透明な人達が立ち現れるホテルのロビーが好きなのだ。
自分もまた、存在しない影のように、密やかにソファにもたれている。

第四十三話　精霊の木

樹木は長い年月を経て生きると、その身に意思の現れを身にまとうものだ。
悩み、抗い、闘って、天を目指して成長を続けるが、その高さに限界が来た時、溢れるように、その思いが木肌に現れ出す。
その時、樹木は既に精霊となっているのだよ。

ほら、この紫ブナを見たまえ。
陽気な木の精霊が身をくねらせて立っている。
思ったより、人間の事を気にかけていないよ。
遠慮せずに、切り株のベンチに腰掛け、彼の顔と枝ぶりを眺めながら、美しい紫の木漏れ日の下で涼むがいい。

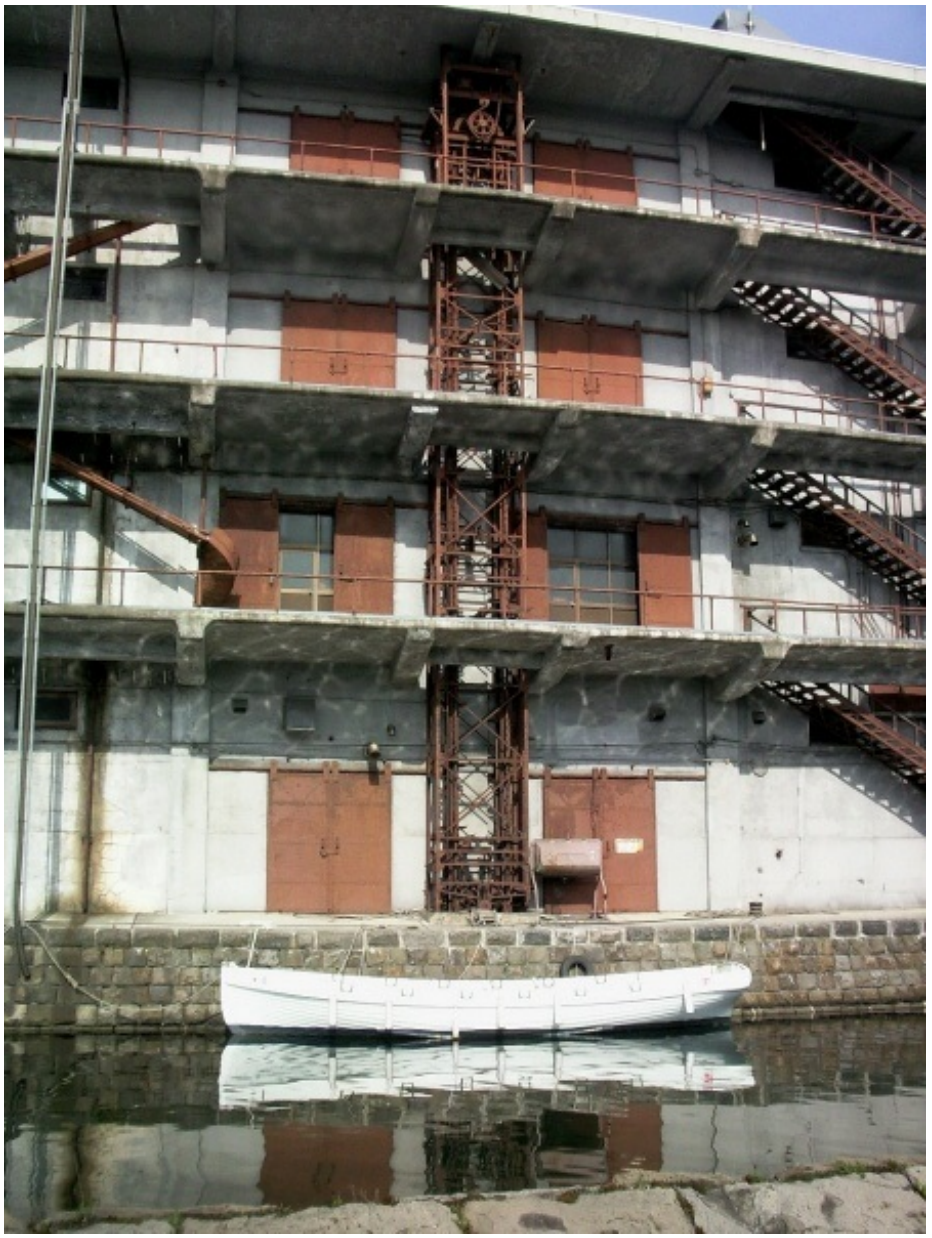
第四十四話　白薔薇

まるで年老いた伯爵夫人のような、くたびれて、豊満で、艶やかな白い薔薇。
その香りは気高く艶めかしい。
例え盛りを過ぎ、その花弁が崩れ、終わりの日が来ても、薔薇の誇りは失われない。

第四十五話　その扉を叩け

望みを持つ者は、その思いを言葉にし、より多くの人に伝え、共感を求め助力を乞うが良い。
扉を開けて貰いたい者は、その扉を叩き、向こう側の人を呼ぶが良い。
遠慮がちに、しかし、しっかりと。
思いを伝える為には行動しなければならない。
祈るだけでは、神も力を貸しかねると言うものだ。

第四十六話　輝く運河



夏の陽光がギラギラと運河の水に跳ね返り、くたびれた無骨な建物の壁に、光の綾を織りなしている。
その揺らめく照り返しを眺めながら、ボートに寝ころび、一人旅をするのは素敵じゃないか？
ボートの中には、本とサンドウィッチ、冷えたシードルも持って乗り込もう。
一人では寂しいだろうって？
そうだね、それなら、ビーグル犬を一匹連れて行こうかな。
どう？それならば、どこまでも楽しく行けそうな気がしないかい？

第四十七話　頭上の華

しばらく前から、頭の天辺がむずむずするような、圧迫されるような、変な感じがしていたのだが、先日、鏡で自分の顔を見てみたところ、頭の上５センチくらいの所に、ぽっかりと白い蓮の花が咲いていた。
何と言うか、幼稚園児が作る、ティッシュを重ねて作った造花を頭に付けているみたいだ。

ああ、これのせいで、ずっと頭が重かったのか、と腑に落ちたものの、どうしてこんな物が自分の頭の上に咲いているのかが分らない。
頭にくっついて咲いているのではなく、頭上に浮かんでいるのだけれど、自分が動くと花もついてくるので、見えない糸でもついているのかもしれない。

そのまま外出したが、誰も奇異な目で見ない所をみると、この花は自分にしか見えないのだろう。
もしかすると見える人もいるのかもしれないが、良く分からない。
頭上に蓮の花が咲いたからと言って、仏縁が出来たわけでもなく、これと言って生活に変わりはないのだが、しいて言えば水を良く飲むようになった。

この花が散ったら、今度は頭の上に蓮の実でも出来るのだろうかと、今から心配している。

第四十八話　山の色

山の色とは不思議なもので、その土地の気候風土によって全く趣が異なる。
勿論、植生が違うのだから当然と言えば当然なのだが、その緑色はもとより、帯びた空気感と言うか、湿り気具合までが異なって見えるのだ。

これはハワイの風の強い高地から向こう側の山を臨んだものだが、その山々は南国らしい力強さと荒々しさを秘めた、濃い緑色をしている。

第四十九話　人工の川

都会には、計画的に造成された人工の川が多い。
きれいに整備された川辺のプロムナードは、近くのマンション群に住む人達にとっては、手頃な散歩道だ。
しかし、水の中には、蛙や魚はいない。
生き物は必要ないのだろう。清潔で美しく安全な、水の流れる景観だけが必要とされているのだ。
きれいだけれど、きれいすぎて不自然な、それが都会の人口の川。

第五十話　水天宮

夕暮れ時、参拝客のいない小さな神社は、ちょっと怖いと思う事もあるけど、ほら両側に座っている阿吽の狛犬が、ひょうきんそうに笑っているから、気軽にご挨拶してみよう。
海の神様水天宮。平家の神様水天宮。子供の神様水天宮。
ガラリ、ガラリと鈴を鳴らしてお参りしたら、もう一度狛犬にもご挨拶。
前足で押さえている珠は、一体どんな宝物なの？
石灯籠に灯りを灯したら、狛犬達、石の体を動かして秘密を教えてくれるかな。

第五十一話　幽き靴音

古い洋館の階段を、ゆっくり上って行く誰かがいる。
長いスカァトの衣擦れの音、サラサラ。幽き靴の音、コツコツ。

スカァトの裾を少し持ち上げ、一段一段ゆっくり、足もとを確かめながら上がってゆく貴夫人は、この館に住み続ける優雅な幽霊か。
それとも、あなたの心の奥から静かにさまよい出て来た、前世の魂の現れか。

窓から差し込む陽光にさらされ、その姿は半透明の揚羽蝶のよう。
昼下がりの幽霊は、存外清々しく 麗しいものだ。

第五十二話　うねる

私はうねうねとうねる。のたうって広がる。広がる広がる、地を這い、遠くへ遠くへ。
土に深く深く潜る、突き刺さり、しがみつく。
水と養分を求めて、私は無心に、この根を伸ばすのだ。

木の葉の心を私は知らない。
太陽の輝きに興味は無い。

私は、ただひたすら土の肌触りと湿り気だけを感じて、身を延ばす。
そう、私は常に飢えているのだ。
止まらない飢えに、この体をねじらせているのだ。

第五十三話　雨上がりに

雨上がりの重く垂れこめた灰色の雲。
灰色が美しくないと、一体誰が決めたのか。
優雅な灰色の雲は、巨大な龍の腹の色。
腹からはがれた落ちた銀の鱗が、西日にギラギラと輝いている。

第五十四話　虹の足もと

子供の頃、海に遊びに出かけたある夏の日の事、私は大きな虹を見た。

大きな上に、とても近くに弧を描いているように見えた。
私は堤防を乗り越え、砂浜に降りて、よくよくその大きな虹を見たところ、その根元の部分が海の中から立ちあがっているのを確認した。

虹の根元は、色が薄くて、ほとんど透明になりながら、海中に溶け込んでいるように見えた。
しげしげと、しばらく見つめていたが、やがて飽きて、近くの祖母の家へ遊びに行った。

携帯カメラもホームビデオも無い、遠い昔の思い出である。

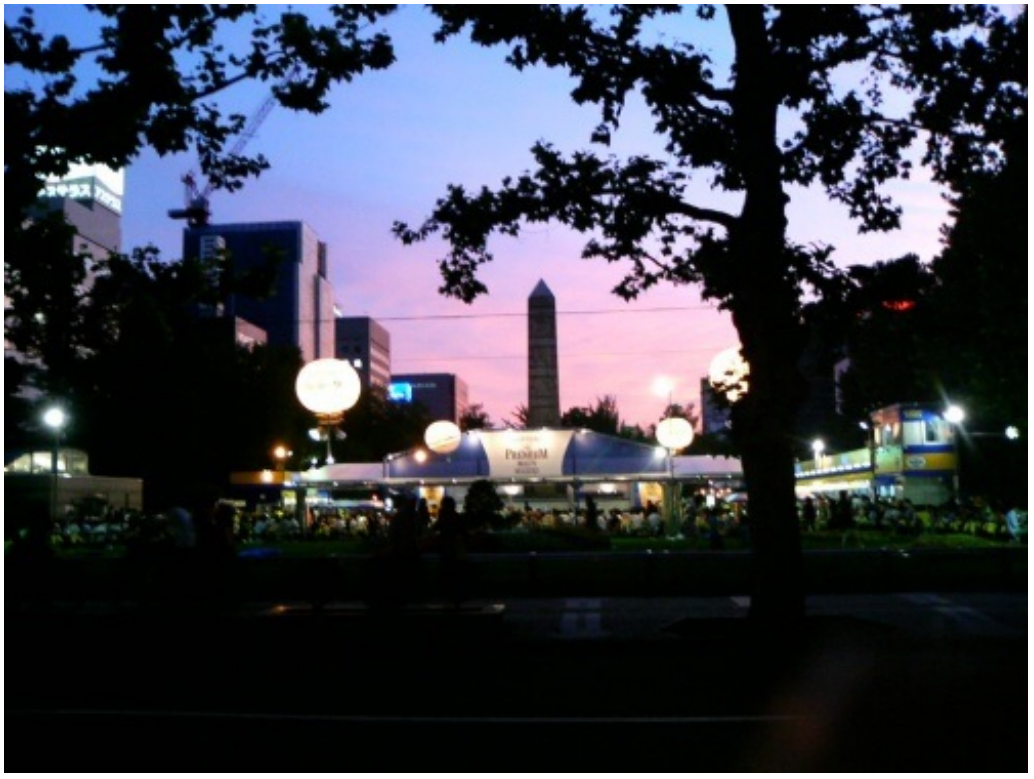
第五十五話　夕涼みで一杯

仕事帰りにビア・ガーデンに寄って、バカ高いつまみ食べながら、フニャフニャのビニール・コップでビールをチビチビ飲みつつ夕涼みするよ。

宵闇の中で、喧騒からちょっと離れて一人呑み。
ポツンと一人でいるよ。

周りの風景が流れるみたいに動くのを、自分だけ立ち止まったように、ぼんやり眺めてるとちょっと楽しい。
クリストファー・ドイルのカメラみたいにね。

ちょっと酔ってるんだよね。
夏の宵はいいね。
一人でも、みんなでも。



第五十六話　三角屋根

住むのなら、三角屋根の洋館がいいね。
寝室は一番上の屋根裏部屋。天井が斜めになって、壁も狭くなっているのを、上手く工夫して本棚を作るの。
後はベッドと机と椅子、小さなクローゼットが有ればいい。
夜は小さな窓を開けて、星を眺めて過ごすよ。

第五十七話　雨

雨の音を聞いている。
しんとした午後の住宅地は、雨音と、時折横切る車の音しか聞こえない。
アスファルトの上に、無数に現れては消える雨の波紋を眺めている。
路上に音符が跳ねる。灰色のランダムな音符だ。

この無機質で単調な音符の羅列は、私の心のざわめきを静めてくれる。
心をかき乱す、カラフルな光を投げかける太陽の出番は、もう少し後で良い。

第五十八話　阿吽

お主が、どうしてこの神社に参ったか解っておるぞ。みなまで言うな。
それこそ、阿吽の呼吸と言うものじゃ。
何？神様がお前の望みを叶えてくれるかだと？
阿呆か？望みを叶えるのはそなた自身じゃろ。何で神様が代理をするものか。

神様はな、お主の望みと決起表明を、我慢強く大きな心で黙って聞いてくれるのじゃ。
有り難い事じゃろう？お前の家族や友達では、こうは行かん。
まぁ、場合によっては根回しせん事もないがな、何にせよ行動するのはお前自身じゃ。せいぜい頑張れ。

おう、帰る前に御神籤引いて行け。お前が学ぶ気持ちさえあれば、そこからだって学べるものじゃ。
おっと、少し喋り過ぎたのぅ。
わしは、阿吽の吽だと言うに。阿に笑われてしまうわ。

第五十九話　市電に乗って

古い市街電車は、鉄と油の匂いがする。
降車を知らせるボタンの音、ポーっと時折放たれる警笛。 最近、聞かれないアナログな機械音だ。

昭和の頃から走っているだろう煤けた車体は、ガタンゴトンと揺れながら、のんびり街の線路を走ってゆく。
懐かしい思い出の様な市電ではあるが、時流に合わせて改造され、プリペイドカードも使えるのだ。

そうそう、昔と変わった点がもう一つ。
運転手さんがね、若い女性に代替わりしているんだよ。

第六十話　小川を前にして

上を見れば、痛いくらいに暑く輝く太陽。下を見れば、その陽を照り返して輝く白いタイル。
もう目も開けていられないくらい、眩しいじゃないか。
まったく、どこの誰がこんな暑苦しく眩しい人工の道をデザインしたのか。

耐えきれず、公園に逃れて木陰の小川近くで涼を取り汗を拭いた。
子供たちが歓声を上げて、小川に入って遊んでいる。
ふむ、裸足になって水に入ったら、どんなにか涼しいだろう。吹き出した汗も引っ込むに違いない。

しかし、さて、いい大人になると、人前で靴や靴下を脱ぎ、水遊びとは気が引ける。許容範囲は二十代前半までだろうか？
子供たちのお母さんたちも、日陰に座ってパタパタ扇子で顔をあおいでいるが、流石に水には入らない。

ああ、水に入りたい、子供のように！
真夏の公園の、何と言うジレンマ。

第六十一話　高台へ急げ！

それ！急げ、熱風渦巻く高層ビル街から脱出だ！
エアコンを効かせた車を飛ばして、郊外の高台まで避暑に行こうよ！
林を抜けて、天辺にある公園で、噴水の水しぶきを体全体で浴びながら、ごみごみしたビジネス街を遠くに眺めるのさ。
都会の姿は、蜃気楼のような建物でパッチワークされた奇妙な夢のようだ。
ここで下界を眺めていると、束の間、世捨て人の仙人の気分。

第六十二話　涅槃で待つ

ある朝、ぽっかりと開く睡蓮の花。脆い夢のように儚く薫る。

逃げよ、逃げよ、纏わりつくカルマから。
いつまでも涅槃に辿り着かない、この世のカラクリ。

避けよ、避けよ、この世の罪、穢れ。

水を絶やすな。ほら、己の足が空回りしている。
ほほっと、雨蛙が笑っているぞ。

第六十三話　真昼の月

太陽の光を浴びない真昼の月は、化粧っ気の無い素顔の衛星。
光をまとえば痘痕も笑窪。 ロマンスの立役者、怪奇の背景。
白く寝ぼけた月の素顔は、案外と朴訥なのんびり屋だ。

第六十四話　待ちあわせ

授業が終わったら、高台にある神社で待ちあわせしようと、あの娘に言った。
時間は言わなかった。時計の針に急かされたり、じりじり待ったりするのが嫌だったからだ。

賽銭箱の中を覗いたり、狛犬の顔を眺めたりして時間を潰す。
そのうち立ち疲れて、鳥居の前の石段に座って待つ事にした。
そろそろ日が暮れる。もう小一時間は経っただろうか。
あの娘は来ない。

振られたのかな？それとも場所を間違えたのかな？
数羽の鴉が、アハハハハと笑いながら頭上を飛んでゆく。
帰れ、帰れと嘲るように笑っている。

第六十五話　夏の庭

スプリンクラーの音が好きだ。
シュンシュンシュンシュン。水を振り撒いてリズミカルに回る。
こんな時、犬を連れていれば楽しいのにと夢想する。
ビーグルの子犬と一緒に、水を追いかけて走りまわりたい。

第六十六話　輪廻

虫に生まれて、魚に喰われる。
魚に生まれて鳥に喰われ、鳥に生まれて獣に喰われる。
さて、獣は獣に喰われるが、人は一体どうなのか？
何も喰らわず、輪廻の鎖を断ち切って、解脱の道を進んでみるか？

第六十七話　月に叢雲

ビルの屋上に立って、叢雲から見え隠れする月を眺める男。
おお、髪が逆立ち背中の筋肉が盛り上がる。
銀色のオーラを全身に纏い、細く長く遠吠えを始める。

雲が切れた、満月が顔を出す。
そら、あいつは前世の姿に戻ったようだ。
毛むくじゃらの体で、大きく跳躍し、夜の闇へ消えて行った。

第六十八話　待っている

すり減った石の階段を登り切った所、資料室の前に簡単な応接用の椅子とテーブルが有る。
そこの椅子に座って彼女はいつも待っている。
ぼんやりと、階段の壁を飾っているステンドグラスを眺めながら。
白い夏のワンピースを着て、時折長い髪の毛先をいじり、階下で行われている、恋人の裁判が終わるのを待っているのだ。

あれから、もう六十余年も経つというのに、彼女の恋人はとうに鬼籍に入っているのに。
今日も彼女は待ち続けている。
唇に微笑みを浮かべて、希望に胸を膨らませながら。

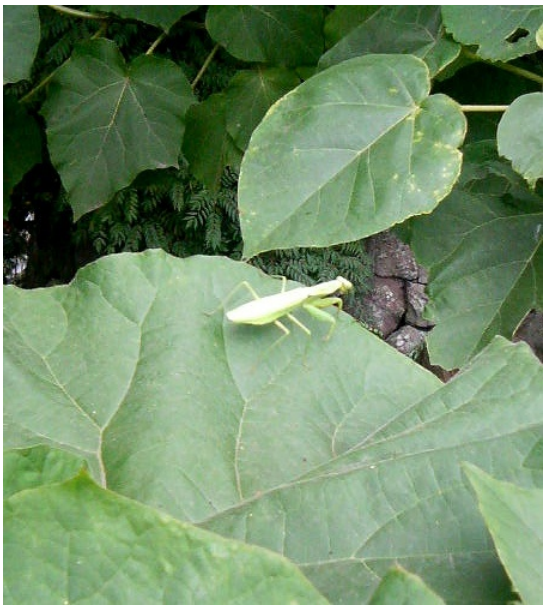
第六十九話　大道芸

トコトントン、太鼓に合わせて竹馬に乗るよ。

なんで、こんな高い棒を操って歩くとみんな喜ぶのか分らないけど。

トコトントン、太鼓を叩くお兄さんも喜んでくれるから、いっちょ張り切って歩いて見せるのさ。

第七十話　夏の虫



石垣の周りに群生する濃い緑の葉の上に、動かないカマキリ一匹。
暑さに参ったか、それとも、その視線の先に獲物でも見つけたか。
お前の一生が何やら大変そうに思えるのは、人間の勝手な空想なんだな。

頭上では、蝉しぐれが騒々しい。
蝉たちの生涯を忖度するのも、こちらの勝手な思いの投影。

彼らは、ただその生涯を、生きる事に集中しているだけなのだろう。
それが無為自然というものなのだろう。

第七十一話　気球に乗って

夢の中で気球に乗っていた。
バーナーがごうごうと音を立てて火を吹き、くんにゃりしていた気球が息を吹き返したように大きく膨らんでゆく。
気球がパンパンに膨らんで、とうとう自分の乗っているゴンドラもふんわりと宙に浮きだした。
地上では気球を固定していたロープをはずしている。

さぁ、これから空中散歩だぞ、と嬉しくて心もはやる。
ふと、頭上を見上げると、カラフルな気球はいつの間にか、大きな黒い蜘蛛にすり替わり、真っ赤な二つの目がギラギラと自分を見つめていた。
長い二本の毛むくじゃらの足が、ゆっくりとこちらに降りてくる…。

正に、悪夢らしい悪夢である。

第七十二話　ヴィオラ

仕事帰りの晩、普段は行かない近所の市場に買い物に立ち寄って野菜を買ったところ、店のおばちゃんが
「お兄さん、一人暮らしかい？殺風景なんでしょう。ほら、この鉢あげるから飾りなさい」
と、黄色と紫の色が花弁に散った花の鉢を一つ、おまけにつけてくれた。

荷物になるので断ろうと思ったが、おばちゃんはさっさと鉢を包んでビニール袋に入れて寄こし「ちょっと、葉っぱが増えすぎちゃってね。これじゃ売り物にならないんだけど、ヴィオラって言うんだよ、キレイでしょ」とニコニコ笑っている。

すっかり、断るきっかけを失い、小声で御礼を言って店を出た。
花の鉢は、置き場に困りながらも、実際殺風景な、僕の部屋の窓辺を飾ってくれている。
ヴィオラ。
三色すみれの仲間なんだろうか。ヨーロッパの少女のような、可憐な花である。

第七十三話　贅沢な時間

これと言って不幸な生活ではない。
そこそこの容姿で、暮らせるくらいのお給料をくれる会社に勤め、健康で家族も元気だ。
恋人はいないけれど、休日を共に過ごす友達は何人かいる。
幸せと言えば、幸せなんだろう。実感はないけど。

よく「自分にご褒美」と言って、ちょっと奮発した買い物をする話を聞くけれど、特別欲しい物もない。
あたしって、つまんない人なんだろうか？

突如、この疑問で頭が一杯になって、気持ちがもやもやしてきた。
なんなの、この変な焦り？

休日、このイヤな気分を払拭しようと、とある高級ホテルのレストランに出かけた。
と言ってもランチバイキングなんだけど。

独り、中庭のテーブルで食事をする。プールと噴水がキラキラと輝いてキレイだ。
「自分にご褒美」の意味が、少し分った気がした。

物ではなく、空間と時間を奮発して買ったってところかな。
そんなに、あたし、つまらない人じゃないよ。
独りでニヤニヤしてるから、ちょっと変な人かもね。

第七十四話　どっち？

さて、ここで質問です。
あなたがご自分の結婚披露宴を開くとしたら、近代的でキレイだけれど、無機質な高層ホテルでの披露宴と、歴史を持つ美しい建築様式だけれど、トイレも旧式な文化施設での披露宴と、どちらを選ぶでしょうか？
※トイレはかなり昭和です。

第七十五話　駅の匂い

会社勤めってのは難儀なものだ。
頑張れ頑張れ、数字を上げろ、自己改革しろ、改善しろ、漫然と仕事をするな。
挙句に仕事を楽しめ、笑顔を忘れるな、と来る。

内心、毒づきながらも、そんな会社にしがみついている自分もイヤだ。
ノルマを達成出来なかった週の日曜日、ふらりと近所の小さな駅に出かけてみた。

近距離のキップを買い、ホームのベンチに腰掛けて線路を眺める。
子供の頃は、このホームに滑り込んでくる電車を眺めるのが好きだったっけ。
いつの間にか駅は寂れ、ホームに人気はまばらだ。

自分の人生は、これからどう進むのだろう。
錆びた鉄のレールを見つめながら考えるが、何にも分らない。

しばらくすると、三両しかない電車が近付いて来た。
取りあえず、あれに乗ってみよう。
そして、車窓を眺めながら、自分がこれからどうしたいのか、じっくり考えてみる事にしよう。

第七十六話　金魚

結婚して遠くに行ってしまう友達が、 私に飼って欲しいと金魚を置いていった。
素焼きの金魚鉢と水草、餌をセットにして。
旅行もしないし、インドア派だからと見込まれたようだ。

そりゃ、犬、猫と比べれば扱いは楽だろうけど、死なせちゃうかもしれないよ、と私が言うと、その時は寿命と思うよ、と寂しそうに答えた。
それに、この子ね、時々脱走しようとするから長生き出来ないかもしれないんだよね。
脱走って？
たまにね、金魚鉢から飛び出して、床で跳ねてる事とかあるの。びっくりして、水に戻すと、また元気に泳いでたけど。もう一つの金魚鉢をとなりに置いておくと、いつの間にかそっちに移動してたりもあったんだ。

一体、どこに行こうとして飛び出すのやら…。
それで、私は心配になり、金魚鉢の脇に水をいれた洗面器を置いておくことにした。
飼ってみると意外と可愛い。
そのうち、隣の洗面器に飛び移るところを見たいものだわ。

第七十七話　メガネにしました

最近、視力が落ちてきて、車の流れが良く見えなくて怖いので、メガネをかける事にしたんですが、まだちょっと慣れません。
夏と冬は、メガネってめんどくさいですよね。

第七十八話　彼岸へと

縁あって生を受け、時満ちて彼岸へ帰る。
ゆらゆらと浮世を漂い生きて、 流れ流れる儚い命。
それでもこうやって見送ってくれる縁者があるのなら、まぁそう悪い世の中でもあるまいよ。

第七十九話　フリマ

友達が、神社で開かれるフリー・マーケットに行きたいって言うから、スケジュール調べて待ちあわせしたのに、当日になって、彼氏に海に誘われたからって、突然キャンセルされた。

内心ムッとしたけど、そうなの、いいよ、楽しんで来てねって、明るい声で電話で答えた。
あたしって、意外に大人だわ。成長したわ。正直、腹立つけど。

お天気もいいし、一人でフリマに出かけて来たけど、やっぱり何だか独りだとテンション上がらない。
ついでだし、神社にもお参りして帰ろう。
そうだ、ちょっと恥ずかしいけど、縁結びのお守りも買おうかな。あの子には、絶対知られたくないけどね。

第八十話　美術館デート

もし恋人にするなら、美術館でデート出来るような人がいい。
別にアーティストじゃなくてもいいし、特別な才能なんていらないけれど、綺麗な物や面白い表現を、静かに一緒に楽しんでくれる人がいい。
静謐な空間で、対象を見つめる時間を豊かに共有出来る人ならば、小さな幸せを、共に大事に育めると思うんだ。

第八十一話　啄木の歌

函館の、青柳町こそ悲しけれ、友の恋歌、矢車の花。

第八十二話　海岸にて

夏になると近場の海岸へ散歩に出かける。
海の中には入らない。
海水に濡れるのは好きじゃないし、良く見ると、砂の上を沢山の小さな虫が跋扈しているのも気味が悪い。

ただ砂浜に打ち寄せられている、何やら分らない物を観察するのが好きなのだ。
切れ切れの昆布や流木は珍しくない。一度、小さな欠けた仏像を拾って家に持ち帰ったが、家族が気味悪がったので、また海岸に戻しに来た事もあった。
何やらの骨が落ちている事もある。勿論拾わないが。

今日は何も収穫が無かったが、遊泳禁止の区域で、一組の母子が水着姿で座り込んでいる様子だけが印象的だった。

第八十三話　陰影

お盆休みに故郷へ帰省したのだが、思いがけず沢山の身内が集まり泊まり切れず、結局自分は駅前の温泉旅館に宿を取る事になってしまった。

ちびっ子の大騒ぎする実家より、のんびり出来るし、宿代は親が出してくれるので文句は無い。
大浴場で汗を流し、敷いてもらった布団に滑り込むと、昼間の疲れもあって、すぐに眠ってしまった。

深夜、ふと目が覚め眠れなくなった。部屋の行燈は点いたままだった。
消さなかったのだろうか？

子供たちのくすくす笑いが聞こえた気がした。
実家に泊まっているちびっ子達、ぼくの様子を見に来たのかな？

第八十四話　稚魚

久しぶりに漁港へ釣りに出かけたが、さっぱり当りが来ない。
昼近くになった頃、野球帽にくたびれたポロシャツ姿のじいさんが声を掛けて来た。
「お兄さん、釣れんのかい？」
「全然っすねぇ」
じいさんは海の中を覗き込み
「おお、こりゃダメだな。なーんにもおらんわ。どれ、お兄さん、可哀想だからちょっと魚を増やしてあげようか」

そして、じいさんはネズミ色のスラックスのポケットから、何やら小さな紙切れを取りだして、細かくちぎり始めた。
俺は、何が何だか分からずキョトンとしたまま、じいさんの手元を見ていた。
じいさんは、その無数の紙片をフッと吹いて海の中に散らし、ニコニコ笑っている。

「これで魚が殖えるぞ。沢山釣れるといいがな」
そう言うと、ひょこひょこと歩いて行ってしまった。

俺は竿を置き、立ちあがって海の中を覗き込んで見ると、いつの間にか無数の稚魚が群れをなして泳いでいるではないか。
びっくりして、じいさんを目で追ったが、もうどこにもいない。

仙人か？でも、じいさん、どうせ殖やすなら稚魚じゃなくて、成長した魚にしてくれよ。
これじゃ針にかかりゃしない。

第八十五話　貸しボート

とにかく、暑い時には水の有る所に行くに限る。
カップルや家族で行くのもいいが、一人で池の貸しボートに乗ったっていいじゃないか。
日差しを避けて 、木陰にボートを止め、カルガモの親子でも眺めていよう。
すれ違ったボートのカップルが、こっちを不審そうに眺めても構いやしない。
時間切れのアナウンスがかかるまで、水の上で涼んでやるのさ。

第八十六話　博物館

故郷の山の中腹に、古い西洋建築の博物館があった。
真夏でも冷房など無いから、大型の扇風機がぬるい空気をかき回すだけで、汗を拭いながら、樟脳臭いガラスケースの中を覗き込んで半日過ごした。

思えば、博物館の展示物が好きだったのではなく、あの建物とその中の、何とも言えない古い空気感が好きだったような気がする。
歪みの有る窓ガラス、ツルツルしたリノリウムの床、すり減った石の階段。

思い出すと、自分の中の何かが呼び覚まされるような気がする。
ＤＮＡに刻まれた、何かだろうか。

第八十七話　縁側

縁側で待ってるね。
冷えた麦茶とスイカも用意して。軒先にはガラスで出来た江戸風鈴も下げておくよ。
風が吹き抜けて涼しいよ。

夏休みも、そろそろ終わりだね。宿題終わった？
昨日の夜、庭に死んだ蝉が落ちてた。
縁側で一緒に過ごすのも、今年はこれが最後かもね。

第八十八話　お茶を一服

コツン。
茶室の中でお茶を点てていたら、何かが窓にぶつかった。
木の実でも落ちて当たったかな？

しばらくすると、またコツンと音がする。
窓から外を覗いてみると、何やら小さな生き物がひょいと生垣の陰に隠れたようだ。

お茶を一服所望したい…。
どこからか、小さなしゃがれた声が聞こえてきた。
さて、物の化か。

そうさな、一服立ててあげようか。

第八十九話　佇む

ご飯も食べたし、後は寝るだけ。
人間の子供たちがキャーキャー煩いから、お尻を向けて知らん顔しておく。
こちとら、子供じゃないんだ、はしゃぐ元気なんてありゃしないよ。
おじさん、立ったまま寝るからね。ほっといてくれよ。
このまま、佇んだまま、大草原を駆けまわる夢でも見るとするよ。

第九十話　鎮守の森

山の上にある神社のお祭りに行こうと出かけたのだが、うっかりして日にちを間違えたらしく、境内はひっそりとし、片づけられたテントやお神輿が倉庫の中にしまわれているところだった。

しかたがないので、お参りをし、お御籤を買って、少し境内をブラブラした。
神社の裏手には、鬱蒼とした濃い緑の森が広がっている。
どちらかと言うと、お宮より森の方が神聖に見えるくらいだ。

じっと目を凝らして見つめていると、その緑のうねりの中に、龍の姿が現れたような気がした。

第九十一話　帰り道

残暑も厳しい八月の末、遠出した街の瀟洒なカフェでアイスコーヒーを飲んで休んだ。
窓から大きな運河が見え、何艘か小さなボートが浮かんでいる。涼やかな風景だ。

いつまでも涼んでいるわけにも行かず、お会計を済ませ外に出ようとすると、出口が見当たらない。
「あれ？どこから出たらいいんですか？」
と、店員に尋ねると、ニコニコと当たり前のように螺旋階段の真ん中の空間を指差した。

そこから下を覗き込むと、何と下には河が流れ、丁度螺旋階段の真ん中辺りに、黄色いゴンドラが一艘待っている。
ははぁ、あれに乗ればいいんだな。

私は螺旋階段の手摺りを乗り越え、ゴンドラの上に飛び降りた。
衝撃で、一瞬大きくゴンドラは揺らいだが、船頭は気にもせず無言で櫂をこぎ出した。

ゴンドラから見上げると、さっきのカフェは、まるで西洋の王侯貴族の城の様な白亜の建物であった。

第九十二話　エア・ポート

とある休日、突然思いついて空港へ出かけてみた。
旅行に行くわけではない。
ただ単に空港へ遊びに行ったのだ。

面白い雑貨やお土産も見つかるし、ちょっとコストは高いが食べる物にも困らない。
広い窓の向こうを離発着する飛行機を見るのも楽しい。

独り遠い目をして、紙コップのコーヒーをすすりながら旅行者のふりをしていると、頭の中に、
往年のラジオ番組の名作「ジェット・ストリーム」のナレーションが蘇ってくる。

第九十三話　子猫

癒されたい、癒されたい。
仕事の人間関係でストレス溜まって、毎日辛い。

ペットが欲しい。
犬もいいけど、一緒にゴロゴロしてくれる猫が欲しい。
スヤスヤ寝ている可愛い子猫を見ていたら、きっと疲れも吹き飛んで癒される！

子猫が欲しい、子猫を飼いたい！と、毎日家族につぶやいていた。

すると、今日仕事から帰ってきたところ、机の上にスヤスヤ眠る子猫が…。
取りあえず眺めていると、それなりに癒されるみたい。

さて、どこかの誰かさんにお礼を言っておかないとね。

第九十四話　瞑想する

気持ちがざわざわと落ち着かなくなってきた時は、瞑想するに限る。

テレビも灯りも消して、しんとした闇の中にキャンドルを灯して、その柔らかな光をぼんやり見つめながら、自分の呼吸のみ意識するのだ。

何も考えずとも良い。

何も思い浮かばなくて良い。

そうして、自分の心が凪いできたら、そこでさっさと寝てしまうのが良い。

夢なんかに期待するなよ。

第九十五話　幸福の指環

結婚が決まった時、どこからか噂を聞いたのか、少しの間だけお付き合いのあった男性から、馴染みの喫茶店に呼び出された。
彼は以前よりやつれ、ちょっとふわふわと漂っているような、妙に浮世離れした表情をして
「お祝いを渡したかったんだ」
と私に黒い小箱をくれた。

そして弱々しく笑うと、またふわふわと漂うように席を立った。
あっけに取られて、ドアを出てゆく彼の後ろ姿を見送っていたが、気を取り直して黒塗りの小箱を開けてみると、黒ビロードの上に、丸い輝石が二つ付いた指環が納められていた。

輝石の一つは水晶の様な透明な珠で、もう一つはレモン色の珠である。
どうして結婚する私に指環なんてくれるのだろうと、少々イヤな気持ちになったが、指環自体は可憐で可愛らしかった。

その銀色の指環を、そっとつまみ上げると、コロリとレモン色の珠が転がって、手の平に落ちた。
「何、これ？嵌ってないんじゃないの？乗せてるだけ？」
レモン色の球を元の位置に置くと、今度は透明な珠の方がコロリと落ちた。
透明な珠を据え直すと、レモン色の方が落ちる。

「何？何、これ？どうなってるの？最初は二つ並んで付いてたのに、どうして？」
どういうわけか、石は一つを指環に据えると、もう一つは落ちてしまうのである。

途方に暮れて、指環の入っていた小箱を見ると、中に小さな紙が貼られており、そこには青黒いインクで「幸福の指環」と書かれていた。

第九十六話　秋の匂い

あれだけ暑かった夏も、するり飛び去り、早くも空気に枯れ葉の湿った匂いが混ざっている。
公園を歩いていると、コツンとつま先に当たるのはドングリの実だ。

夕暮れの赤みがかった水色の空を眺めて、ああ、もっと真夏の夜を楽しめば良かったと、例年のごとく軽い後悔を覚える。
とは言え、この乾いた枯れ葉を踏みしめる感触、これから始まる鮮やかな紅葉も、心躍る経験には違いない。

枯れ葉を踏みしめて、しばし佇む。
秋の匂いが体全体を包むのを感じる。

第九十七話　小径

紅葉も盛りの頃、田舎の一軒家で独り暮らしをする、お祖母ちゃんの家へ遊びに来た
学校を卒業して、やっと決まった勤め先を、たった半年で逃げるように退職してしまった身としては、どうも顔を出すのが申し訳なく不義理をしてしまったが、冬になる前に家の片づけを手伝ってあげて欲しいと母に頼まれ、重い腰を上げたのだ。

まだ定職に就いていないので、家族の中で一番時間が取れるのが自分なのだから、仕方がない。
就職祝いに貰った三万円、結局生活費に消えてしまったなぁ。靴でも買いなさいってくれたのに、情けない。

久しぶりに会ったお祖母ちゃんは、仕事の事は何にも聞かず、ただニコニコと、良く来てくれた、助かる助かる、と何度も繰り返した。
今日は二人でストーブと煙突を取り付けた。
流石に石炭ストーブではないが、古い大型の灯油を焚くストーブだ。

お祖母ちゃん、こんな古いストーブじゃなくて、ガスとか灯油ＦＦにしたら？煙突とか面倒じゃない？と、言ってみたが、お祖母ちゃんは、これは便利なんだよー、ここで煮炊きが出来るんだから、と軍手を煤だらけにして笑っていた。

さっきまで、二人で掃除をしていたのだが、一息入れて、私はインスタントのコーヒーを飲みながら枯れ葉に埋もれた庭の小径を眺めている。

もうすぐ、ここは真っ白な雪に覆われ、お祖母ちゃんは毎日雪かきで大変な思いをするのだろう。
ここで仕事が見つかるなら、一緒に暮らしてもいいかも、なんて勝手な事を考えていると、小径の向こうに、ウキウキと歩いてくる母の姿が見えた。

やれやれ、ちょっと煩くなるぞ。
夕飯の支度をしているお祖母ちゃんに教えてあげなきゃ。

第九十八話　白い世界

深夜、鼻の頭が冷たくて目が覚めた。
外はシンと静まっていて、空気に冬の匂いがする。

窓の方を何気なく見ると、いつもより何だか明るい。
これはもしかして、と起きてカーテンを開けてみたら、案の定真っ白な雪景色だ。

とうとう来てしまったか…。
これから半年、この白い厄介者との戦いが始まるかと思ったら、すっかり眠気も飛んでしまった。

パジャマの上に、厚手のカーディガンを羽織って、音もなく降り積もる雪を眺める。
オレンジ色の街灯に照らされて、ひらひらと輝き、幻想的な美しさだ。
その美しさが、せめてもの救いに思える。

さて、冷えてきたので、もうベッドに戻ろうか。

第九十九話　永遠の華

気分が塞ぐ時は、満開の桜の花を思い出すようにしている。

辛いことや苦しいことを、ぐるぐると何度も考えていても、良いことが起こるわけじゃない。
いっそ、ちょっと考えを切り替えて、思いっきり綺麗なものや楽しいことを考えた方が、気持ちが明るくなって良いアイディアも浮かびそうよ。

だから心の中に、沢山の花の写真を集めたアルバムを作っておくの。
その中でも、一番華やかなのは何と言っても満開の桜の花。

冬でも秋でも、いつでも見られる。
決して枯れない、私の永遠の華。

この作品はブログ「白嘘物語」に連載していた小説を、加筆修正したものです。
お読み頂き、誠にありがとうございました。
尚、ブログは２０１１年１２月に別のアドレスに移行しています。
新しいブログは「白嘘物語-つくもうそ物語」です。

白嘘物語ーつくもうそ物語
http://p.booklog.jp/book/13131

著者：葉山ユタ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hayamayuta/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/13131

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/13131